センサスに見る林家の動き

自己保有山林面積が，0.1 haから100 ha 程度までの，いわゆる中小規模林家の経営改善は，山村の振興と林業の発展のうえで，大きな課題である。そこで長野県内の林家は，どのような生産活動をしているか。過去3回にわたって実施された農林業センサスの結果から，ここ20年間の変化の状況と現状をみながら，今後の方向についても考えてみることとする。

農家でない林家の戸数が増えた

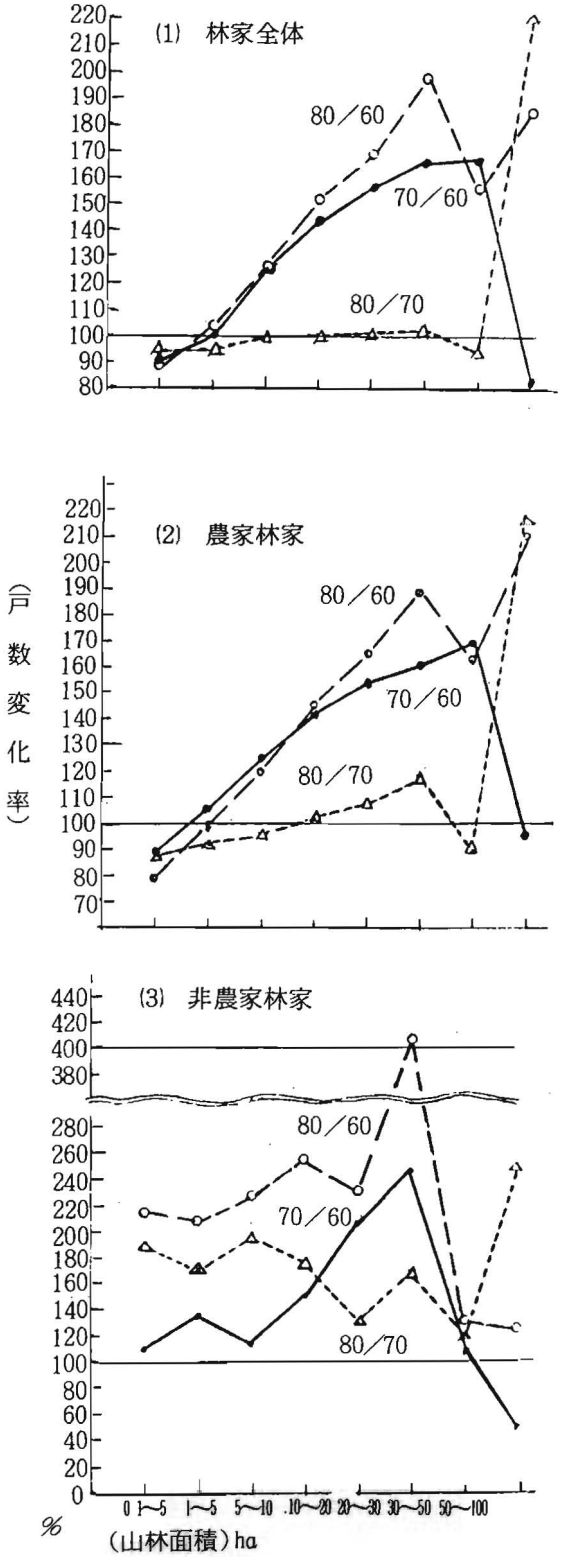
・林家全体　1960 年当時は 97,817 戸であったが20年後の 1980 年現在では 92,644 戸と 94.7 %に減少した。これを保有山林面積規模の階層別に，10カ年毎に戸数の変化割合を，(1)林家全体，(2)農家林家，(3)非農家林家の三つに分けて示したのが，図－1である。林家全体でみると，過去20年間に山林面積が20haから 100 haまでの，中規模階層の林家数の増加が目立っている。

・農家林家　農家でかつ林家の戸数は，20年前の 93,230 戸を基準にすると，現在は 11.3 %程減少し 82,695 戸と，全林家数の89%となっているが，1960 年から 1970 年の10カ年間に，見かけの上では中規模階層林家が増加している。

・非農家林家　農家でない林家の戸数は，20年前には全林家数の 4.7 %の 4,602 戸であったが，現在では全林家数の 10.7 %の 9,949 戸と，戸数比では，2.2 倍に増加した。この傾向を過去20年間について，山林面積規模の階層別にみると，120 %から 400 %程も増加していることが，図から読み取ることができる。

雇われを主な業とする林家が多い

・林家の主な業の変化　保有山林面積が 5 ha以上の林家について，何を家の主な業としていたかその変化をみる。20年前には全林家数の81%が農業を主な業としていたが，現在では何と36%までに少なくなった。代って増加したのが，会社や工場に勤めるサラリーマンや日雇い等に従事する，雇われである。20年前には全林家数の 7 %であったのが，現在では50%と，比率からみると 7 倍強に増加した。林業が主な業である林家は，20年前には全林家数の 4 %であったが，現在はわずか 1 %である。



図－1　林家数の保有山林規模階層別変化

・階層別にみた主な業　林家の主な業を，山林面積の規模階層別にみた現状は，図－2のようになっている。いずれの階層でも雇われ主業の林家が最も多く，40%から50%の戸数比率になっている。農業が主業の林家は各階層で30%から40%となっ

表－1　人工林の保有状況（1980）

（%）

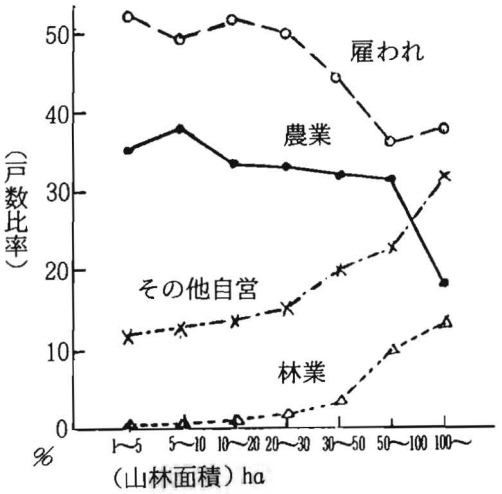
区分 ＼ 山林面積 ha		1～5	5～10	10～20	20～30	30～50	50～100	100～	計
人工林保有林家数	農家	91.4	97.7	98.0	98.3	99.3	100	100	92.8
	非農家	87.9	93.4	97.6	95.7	100	94.1	90.0	89.6
人工林面積率	農家	57.7	57.7	55.4	52.3	54.1	61.3	49.4	56.4
	非農家	59.6	60.1	58.6	60.5	62.5	58.0	59.2	59.7
人工林率80%以上林家数	農家	34.7	32.3	27.9	21.2	23.9	29.8	21.4	33.7
	非農家	41.7	38.0	32.2	26.1	40.5	35.3	40.0	40.3

ているが，山林面積が100 haを超すと20%以下となり，その他自営を主業とする林家が，逆に多くなる。林業を主業とする林家は，山林面積50ha以下の階層ではいずれも5%以下と少なく，100haを超える階層となっても14%程度である。

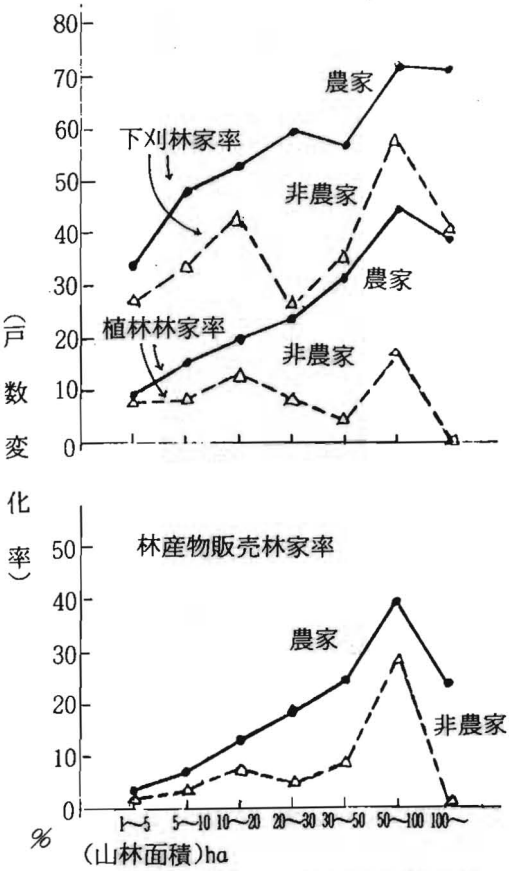
継続的な生産活動をしている農家林家

・人工林の保有状況　表－1をみると，まず人工林を保有している林家の比率を，農家林家と非農家林家の別に示してある。人工林を保有している戸数比率は農家林家が多く，林業への関心は非農家林家よりも高いと，一応いえそうである。次に保有山林面積に対する人工林面積の比率と，さらに人工林率が80%以上となっている林家の戸数比率をみると，いずれも非農家林家が農家林家よりも高くなっている。これは，農家林家では人工林をもっている戸数比率は高いが，全山植林を済ませてしまうケースは少なく，反対に非農家林家では，人工林をもつ戸数比率はやや低いが，いざ植林するとなると，全山をあらかた人工林化してしまう場合が多いとみることができる。

・林業生産活動　1カ年間に生産活動を行った林家について，農家林家と非農家林家との比較ができるようにしたのが図－3である。植林をした林家数，下刈をした林家数，及び林産物を販売した林家数を山林面積の階層別にみると，いずれの場合も農家林家が非農家林家に比較して，活動が活発である。しかも農家林家では山林面積の規模が大きくなるに従って，生産活動が活発になる傾向がみられるが，非農家林家では，山林面積と活動の関連はあまり明確でない。非農家林家でも，特定の林家については，生産活動が活発であるという見方もあるが，その数が少ないために，平均値としては表面にでてこないことになる。



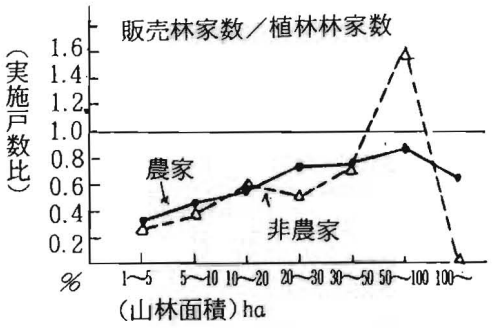
図－2　林家の主業構成（1980）



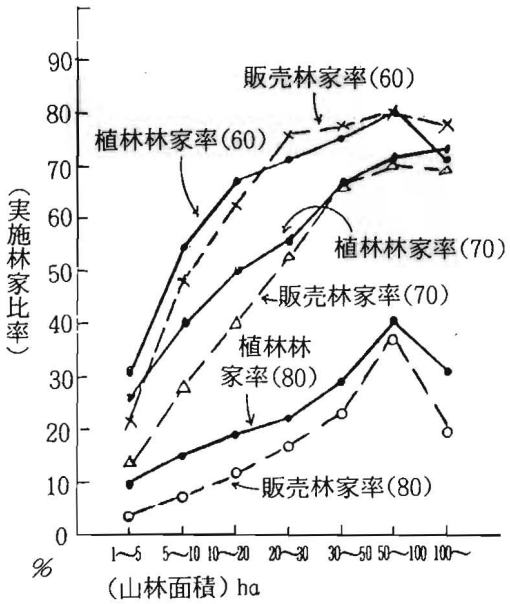
図－3　農家・非農家別林業生産活動（1980）

・販売と植林のバランス　林産物を販売した林家数を，植林をした林家数で除した比を図－4に示してある。この数値が1.0になれば，林業生産の活動が，実施戸数のうえではバランスがとれていることになる。農家林家では，保有山林面積が大きくなるに従って，植林＝投入と，販売＝産出のバランスが1.0に近づいて，生産が改善される傾向がみられる。これに対して非農家林家では，山林面積が50ha以上の階層になると，投入と産出のバランスが大きく崩れている。

・実施戸数率の高い農家林家　農家林家の生産活動は，個々の林家についてみると，1カ年間の実行量が少なく細々としているが，実施戸数率でみると非農家林家を上回っている。また，植林と林産物販売の実施林家率の比率からみても，農家林家の生産活動が非農家林家よりもバランスがとれている。林業生産活動は，なるべく年々継続して実行することが望ましいのであり，こうした傾向は農家林家に明らかにみられるといえる。



図－4　農家・非農家別投入・産出バランス（1980）



図－5　林家の生産活動(60，70，80)

林家の生産活動　過去・現在・未来

・この20年間の林家活動　県下の林家全体について，植林と林産物の販売を実施した林家の比率を，20年前，10年前，そして現在と時間を追って示したのが図－5である。いずれの時点においても，山林面積の規模が大きくなるに従って，生産活動を実施した林家の比率は高くなる傾向がみられるが，年々全体の比率が減少してきた。減少の原因としては，外材輸入量の増加，農家林家の兼業化の進展が大きく影響していると考えられるが，非農家林家の著しい増加も無視することができない要因である。

・新しい生産への転換期　①1980年について保有山林面積に対する植林面積と下刈面積の比率を，山林面積規模の階層別に算出してみると，その差はあまり大きくなく，むしろ小規模階層の林家の比率が高い傾向があり，小規模林家の育林活動が積極的な面もみられる。②1960年代の高水準時代を基準にすると，現在の生産活動はかなり低調である。しかし山林面積1ha以上の林家の人工林率は，この20年間に37％から57％へと上昇し，森林資源は充実している。③最近の木材価格の低迷から，林業生産の現場では，伐採量が少なくなり伐採林齢は高くなりつつある。結果的に森林の蓄積量は増加し，育林労働の年平均投下量を減少することとなる。以上のことから今後の林業は，労働節約的な生産へと転換してゆくであろう。

・これからの林家活動　森林の生産力向上が単なる財産保持に終らないよう，これからは山村に居住して生産活動が行える条件の整備が必要である。また山林規模の大きな林家はより計画的な林業生産を行なうこと，中規模林家では特用林産物や農業との複合経営による基盤の充実を図る，小規模林家では生産の団地化と，さらに非農家林家では施業委託も必要となろう。国産材時代を築く基盤として，林家の積極的な活動が要請される。

（参考文献　熊崎　実「この20年間の中小林家の経営動向」林業経済研究No. 101）

（経営部　渋沢）